

背景知識の教授をめざした「日本事情」への映像使用

桑本 裕二, 宮本 律子

The Introduction of Audiovisual Materials into *Nihonjijo* for Teaching Cultural Background Knowledge

Yuji KUWAMOTO and Ritsuko MIYAMOTO

1. はじめに

本学の教養基礎教育の教養教育科目として「日本事情」が開設されている。「日本事情」は、昭和35年の留学生制度改正以来行われてきた、留学生教育の一環と位置付けられる科目であるが、開設以来、講義内容や具体的な教授法については様々に議論されてきた(水谷 1990)。現在もなお、授業担当教員や大学の諸事情により、教授法、授業内容は多様であるという現状である。本学においても、宮本(1995)のテレビの報道番組や新聞記事の紹介をもとにした討論形式の方法、宮本他(1998)の人文科学系教員によるリレー形式の講義、宮本・松岡(1999)の外国人留学生と日本人の混成グループによる秋田地域や大学を紹介するホームページを作る試みおよび文化項目に関する講義を中心としたもの、また、桑本・宮本(2005)で報告した、日本文化に関する口頭発表形式の授業など、これまで様々な方法で取り組んできた。

宮本(1995)は、「日本事情」の教授法に対し2通りの考え方を示し、それらを秋田大学の留学生教育において実践してきた。一つは、日本語の学習を補う背景知識と見なし、言語教育の一環として教授するもの、もう一つは、日本そのものの知識として従来的一般教育の一科目にあたるような講義をするという捉え方である(宮本 1995: 3)。本学では、これらのうち前者を「日本事情Ⅰ,Ⅱ」として、後者を「日本事情Ⅲ,Ⅳ」として開講している。ここ数年来「日本事情」についてはこれら2科目の体制で行っているが、「日本事情Ⅰ,Ⅱ」を宮本が、「日本事情Ⅲ,Ⅳ」を桑本が

担当して現在に至っている。

これらの科目は、本来留学生の日本語教育の一環と位置付けられているが、日本人の学生も履修が可能であり¹⁾、その授業の展開、具体的な内容に関して、外国人留学生であるか日本人学生であるかの区別をあえてしない、柔軟な視点で臨むことを余儀なくされている。宮本は「日本事情Ⅰ,Ⅱ」において、これまで様々な形式で授業を試みてきたが、一貫して目標としてきたのは異文化交流の実践の場としての位置づけであった(宮本・松岡 1999: 64)。一方、桑本は「日本事情Ⅲ,Ⅳ」で、2003年度前・後期および2004年度前期の3期において口頭発表形式の授業を展開したが(桑本・宮本 2005)、この授業においても日本人の学生の参加ということを意識し、日本人に対しては母文化である「日本文化」を客観的に捉えなおすことに、また、本来の対象者である外国人留学生に対しては、出身国の文化認識から発し、これと日本文化の異同を理解することに重要性を見いだした。そして、日本人学生にとっては日本文化とそれを客観視した視線の間に、外国人留学生にとっては出身国文化と日本文化の間に、相互的かつ双方向的な異文化を理解することを目標とした。このように、宮本による「日本事情Ⅰ,Ⅱ」と、桑本による「日本事情Ⅲ,Ⅳ」は、双方ともに多元的な文化認識を踏まえた上で日本文化理解を目指すという共通した到達目標に沿って展開されてきたといえる。

このような異文化間の異同の認識、教授に関しては、上述の実践報告で述べているとおり、伝統

的にこれまで行われてきたような正統的な文化項目の教授、理解よりは、それらの背後に潜む「背景知識」を探り出し、それがどのように日本社会の中で影響し、人々の言動に反映しているのかを分析し理解することのほうが、はるかに効果的で実情に合っているということがわかってきた。それゆえ、「日本事情Ⅲ,Ⅳ」は本来日本文化に関する知識、ことに「正統的な」日本文化に関する知識の教授が目的であるが、本来「日本事情Ⅰ,Ⅱ」に任せられている「背景知識の教授」をあえて「日本事情Ⅲ,Ⅳ」にも盛り込んで授業を行ってきた(桑本・宮本 2005)。この授業では、外国人留学生たちが日本社会での生活で日頃抱いている日本文化に対する心理的ストレス、疑問、滑稽に感じることなどの根本的な原因が、ここでいう背景知識に帰するものと考え、それを詳しく分析し考察することで、ひいては個別の(正統的な)日本文化の理解をも同時に目指したものであった。

この授業実践に引き続き、2004年度後期の「日本事情Ⅳ」ではこの「背景知識」を映像の中から観察し、考察する試みを実践した。具体的には、日本映画をDVDソフトやビデオテープなどを用いて受講者に鑑賞させ、登場人物の言動や細かな物品や習慣などを探し出して指摘し、それらがいかにかに日本文化を反映しているものかを考察したものである。桑本担当のこの形式の授業は、引き続き2005年度前期開講の「日本事情Ⅲ」および後期開講の「日本事情Ⅳ」でも実践してきている(本論原稿提出時2005年度「日本事情Ⅳ」は継続中)。この授業における、映画のストーリーに関した、または映画全体のテーマに則した日本文化の考察および具体的な実践報告については、桑本・宮本(forthcoming)で扱っているが、本論は、同じ授業における背景知識の考察に焦点をあてた論考である。映像資料を用いた「日本事情」の実践例は、ラドック(2002)などがあるが、背景知識に焦点をあてたものは筆者が知るかぎり皆無に近く、本論で報告している実践・成果は、新たな視点での映像使用の試みと位置づけられる。

2. 背景知識の教授への映像使用の意義

2.1. 日本語教育への映像使用の意義

日本語教育の現場に映像資料を導入するという考え方は、土井(1997)、熊谷(2003)などに支

持されている。土井(1997:43)は「ざぶとんや風呂敷、あいさつの仕方、名刺交換の習慣、など、ことばで説明するよりも、映像で見せた方がわかりやすいものはすぐに思いつく」とし、日本語教育への重要性を説いている。また、ドラマ仕立てのストーリーの展開を伴ったものに対しては、身振り手振りや視線などを伴ったコミュニケーション場面の学習に役立つとしている(土井 1997:45)。熊谷(2003:7)は、ドラマに関しては、展開している会話にはすべてシナリオがあり、それに基づく「つくりもの」であるから、バラエティー、スポーツ中継、報道番組など他のテレビ番組に比べて、自発性や即興性がなく、自然言語からは遠く隔たっているとみる。その一方で、水原(1999)を引用しつつ、舞台演劇のような不自然な長ぜりふもなく、日常性が要求されているジャンルだとも述べ、さらに、場面のバリエーションが豊富で、定型的な決まり文句以外の言語行動の展開例を収集しやすいとし、結局は日本語教育への利用しやすさを主張している(熊谷 2003:11)。映像資料の日本語教育への導入は、ラドック(2002)に報告されている。ラドック(2002:213)は、生のビデオの有効性については、以下のような点を挙げている。

- ・学習者に文型やその文脈における機能的意味について注意を払わせる機会を与えることができる。
- ・生の日本語のストレス、イントネーション、リズムを聞くと同時に、話している人の顔の表情や、身振りなども観察できる。
- ・その文化に特有の事項、言語外の意味なども観察する機会が与えられる。

また、特にドラマについては、その内容が実際のコミュニケーションと関連した文化知識の一つでもあって、学習者は自分自身の日常生活の社交パターンと照らし合わせることができるので、文化紹介のビデオなどより効果的だとしている(ラドック2002:213)。ラドック(2002)はドラマ使用の意味合いの大部分を聴解演習の一環として見なしているようであるが、部分的には文化理解の場としての認識も持っている態度がうかがえる²⁾。

2.2. 映像資料の中の文化的背景知識

このように、映像資料を日本語教育へ導入する

ということは多くの研究者により支持されてきており、実践報告も含めてその意義も強く主張されてきた。これらの主張の多くは映像資料の語学教育への導入が主眼となっているようである。筆者は、日本語教育への映像使用について、文化項目の教授を主に見据えたものとみなしたい。具体的にいえば、「日本事情」への導入である。「日本事情」の到達目標は、1節でも述べたとおり、文化に関する知識の教授である。本学の日本語教育では、「日本事情」に関して背景知識の教授をとりわけ重要視する傾向にある。このような背景知識の教授ということをめざして実践した内容について考察したのが本論である。

背景知識は、映像の中で、様々な場面で、登場人物たちの会話の中に、あるいは登場する場面設定や様々な物品の中にさりげない形で介入している。本論では、そのような背景知識に注目し、探り出し、それらのもつ文化的な背景について考察した。熊谷(2003)、ラドック(2002)も主張しているように、ストーリーをもつ、そして様々なコミュニケーション場面を反映していることによりやはり映画が適していると考えた³⁾。背景知識は、より日常的な場面、または「いかにも」日常的と思われる「つくられた」シナリオの中に存するものとされるため、映画作品の選択も、できるだけ日常を描いたもの、そして、時代設定は現在のもの(少なくとも20年くらい前までのもの)とした(桑本・宮本 forthcoming)。

授業の実践は、2004年度後期の「日本事情Ⅳ」、2005年度前期の「日本事情Ⅲ」、および、本論原稿提出時進行中の2005年度後期の「日本事情Ⅳ」で行ったものである。次節において、実際に行った日本映画の中にみられた日本文化の背景知識について分析と考察を行う。

3. 分析と考察

3.1. 使用した映画資料

2004年度後期から2005年度にかけて実践してきた授業において鑑賞に使用した映画は次のとおりである^{4),5)}。

-2004年度後期「日本事情Ⅳ」-

『男はつらいよ・寅次郎真実一路(第34作)』
(以下『寅34』)

『おもひでぼろぼろ』(以下『おもひで』)(ア

ニメーション作品)

『釣りバカ日誌3』(以下『釣りバカ3』)

『釣りバカ日誌9』(以下『釣りバカ9』)

『世界の中心で、愛をさけぶ』(以下『世界中』)

-2005年度前期「日本事情Ⅲ」-

『男はつらいよ・花も嵐も寅次郎(第30作)』
(以下『寅30』)

『Shall we ダンス?』(以下『ダンス』)

『SWING GIRLS』(以下『SG』)

『さびしんぼう』(以下『さびしんぼう』)

-2005年度後期「日本事情Ⅳ」(本論提出時継続中)-

『男はつらいよ・拝啓車寅次郎様(第47作)』
(以下『寅47』)

『おもひで』以外の作品はすべて実写による映画であり、会話の日本語を登場人物の実際の動きなどと連動させて観察できるという利点をもつ。『おもひで』はアニメ作品であるが、ストーリーの展開にアニメ作品独特の非現実的な部分が少なく、また、登場人物の動き方などにも実写に近い技法がとられており、実写映画と大差なく扱うことができた。

3.2. 背景知識の分類

3.1. 節でリストに挙げた映画作品の中に、日本文化に関わる様々な背景知識を発見することができた。中には日本人の立場では気づきにくいものも多数あり、外国人留学生の授業中の発言による指摘や課題レポートの記述で初めて気づくものがあつた。また、日本人学生に対しては、このような項目をいかに感知できるのかという問いかけを行い、日本を客観視することで日本文化を再発見するよう求めた。さらに、いくつかのこのような背景知識が、留学生の出身国の文化の中ではどのように捉えられるのかを、それぞれの国出身の留学生に問いかけ、また、日本人学生にも考えてもらい、受講者全員で考察する機会とした⁶⁾。

2年3期にわたって行ってきた「日本事情Ⅲ、Ⅳ」において、鑑賞した映画の中にみられた日本文化に関わる「背景知識」を映し出していると思われる主な項目を分類すると以下のとおりとなる。これらの項目は、授業担当教員が見つけ出して授業において指摘したものがほとんどであるが、外国人留学生の指摘、評価レポートの中での

指摘に基づくものも含む。

大まかな分類として、I. 社会の中のできごと、II. 家庭での、または余暇のできごと、III. 恋愛・結婚、IV. 日常生活に入り込む「年中行事」の4種類にまとめることができる。なお、それぞれの項目の末尾に、それに関する描写を含む作品を『 』で付す。

I. 社会の中のできごと

①会社およびその周辺・職業選択

- ・マイホーム購入と長距離通勤『寅34』『ダンス』
- ・社長と平社員・同期の部長と平社員『釣りバカ3・9』
- ・中間管理職の苦悩，上下関係『寅34』『釣りバカ3・9』『ダンス』
- ・同僚の飲み会での気遣い『ダンス』
- ・駅のホームでダンスのステップ練習『ダンス』
- ・仕事に疲れて家出『寅34』
- ・家庭を犠牲に仕事『釣りバカ9』
- ・仕事に生きがい？『おもひで』『ダンス』

②酒・飲酒・宴会

- ・女性が家に電話してごまかして飲みに行く『寅30』
- ・お近づきのしるしに一杯『ダンス』
- ・スナックのカラオケ『釣りバカ9』
- ・「宴会部長」，接待の宴会『釣りバカ9』

③高校生の学校生活

- ・自転車通学『SG』『さびしんぼう』
- ・男女共学の高校『SG』
- ・部活動とそのありかた（吹奏楽部／野球部）『SG』
- ・高校野球と一般社会『SG』
- ・塾や夏休みの補習授業『SG』
- ・ブランド品を身につける女子高生『SG』
- ・女子校を遠巻きに見る男子高校生『さびしんぼう』

④小学生の学校生活

- ・夏休みのラジオ体操『おもひで』
- ・給食『おもひで』

II. 家庭での、または余暇のできごと

⑤日常生活から

- ・寺の息子のクリスマス『さびしんぼう』

- ・居間に集まって一家団欒『寅30』『おもひで』
- ・名前の説明，菜穂——「ナッパの菜にイナホの穂です」『寅47』
- ・息子が友人宅へ訪れたときの先方への挨拶『寅47』

⑥食生活に関して

- ・焼きそばパン『世界中』
- ・コロケに醤油をかけるかソースをかけるか？『世界中』
- ・松茸『寅34』『SG』

⑦余暇・レジャー

- ・20年前のウォークマン『世界中』
- ・暇つぶしとしてのパチンコ『ダンス』『寅47』
- ・「ダサイ」趣味，社交ダンス／ジャズ『ダンス』『SG』

III. 恋愛・結婚

⑧恋愛・結婚

- ・相合い傘の落書き『おもひで』『世界中』
- ・お見合いの話題『おもひで』『寅30・47』
- ・農家の嫁になる？『おもひで』
- ・幸せな家庭の無感動な夫婦関係『ダンス』『寅47』

IV. 「日常生活に入り込む「年中行事」

⑨年中行事などの描写

- ・秋祭り『寅30・34・47』
- ・結婚式『釣りバカ9』
- ・葬式『寅30』
- ・正月『寅30・34・47』『さびしんぼう』
- ・七五三『寅34』
- ・彼岸の花売り『寅30』
- ・節分の豆まき『さびしんぼう』
- ・年末の商店街の福引き『さびしんぼう』

3.3. 分類された背景知識に対する考察

3.3.0.

以下では、3.2. 節で分類した4種類の項目について、背景知識がどのように映画の場面において描かれていたのかについて考察する。

3.3.1. 「社会の中のできごと」について

この項目には、大人の場合は、職場での人間関係，ストレス，仕事に対する情熱や家庭との関わり

りに関して、子供の場合は、高等学校や小学校での様々なできごとにまつわることが挙げられる。つまりここで扱われる分類は、描かれている対象の人物の年齢は様々であるが、いずれの場合も公の場面での人間関係に関連する背景知識である。

大人の場合の「社会」とは、職場である。多数の作品において職場の場面設定があり、ごくありふれた職場の風景が描かれている。その中では、会社の地位の上下関係や、「たてまえ」に基づく公私の区別、中間管理職の苦悩などが典型的な背景知識と考えられるだろう。

上下関係については、『ダンス』の冒頭で会社の飲み会のはしごをするときに上司を気遣うOLが描かれ、また『釣りバカ3・9』では建設会社の社長と平社員の関係が趣味の釣りでは立場が逆転することがコミカルに展開している。「たてまえ」については、『釣りバカ3・9』において主人公浜崎伝助の公私を隔てないふるまいによって、その無意味さが皮肉っぽく描かれている。『ダンス』では、社交ダンスの趣味を会社の同僚に必死に隠す描写がある。中間管理職のふるまいについては、たとえば、『寅34』で、悩んだ末突発的に家出をするサラリーマンが登場している。『ダンス』『寅34』ではマイホームを手にしなが、長距離通勤で苦勞する様子が描かれ、『ダンス』においては帰宅途中の駅のホームでダンスのステップを練習する場面がある。これは、通勤サラリーマンのゴルフのスイングをする姿を彷彿させるが、このような場面からは、多忙なサラリーマンの一時の癒しと、休日の接待ゴルフなども暗に語られていて、「ありがちな行為」であるだけに色々な意味で象徴的な項目であると考えられる。

さらに、代表的な項目は、飲酒、酒である。会社での商談や仲間内の親睦には欠かせないものという意味合いが強い。『ダンス』では、社交ダンスを始めた日に「お近づきのしるしに」といってダンス教室に通うもの同士で居酒屋へ出かける。『釣りバカ9』では主人公と同期で部長の男が癒しを求めて行きつけのカラオケスナックへ通う。同じ『釣りバカ9』の中で、建築会社としての建築現場の関係者の接待を目的とした宴会が描かれる。当然「宴会部長」と目される「盛り上げ役」（主人公が大概このような役をすることになる）が存在する。ただし、女性が夜の盛り場へ行くこ

とは家庭ではよく思われないので、家に電話してごまかしたりする（『寅30』）。

『世界中』『SG』では、高校生である主人公とそれをとりまく人物に焦点をあて、若い世代の公の場、この場合はつまり「学校」とその周辺にみられる背景知識に注目した。高校が共学であることや、夏休みの補習授業など（『SG』）、国の制度上、外国人には不思議に感じられる項目があったが、中でも高校野球のあり方は日本文化全体に影響している背景知識であり、よい点・悪い点双方とも挙げて考察する価値のある項目であった。受講学生は大学生であるので、高校生や、小学生（『おもひで』）がモチーフでは、幾分対象外であるかもしれなかったが、十分に背景知識として考察する価値のあるものは多数あった。

3.3.2. 「家庭での、または余暇のできごと」について

前節の「公の」場面に対して、家庭、または余暇のできごとの中にも典型的な文化的背景知識がある。

映画の中でもっとも家庭を象徴的に表す場面は、食事のシーンである。『おもひで』では約40年前（昭和41年頃と言及されている）のふつうの家庭の食卓が描かれ、台所つきキッチンでテーブルに椅子という食卓で食事をする家族が描かれる。一家の中で威厳を保つ父親の座り位置や、タマネギが嫌いで脇に寄せては母親に怒られるシーンがさりげなく描かれている。『寅30』では、主人公車寅次郎の叔父夫婦でのにぎやかな夕食風景の中で、招待された母子家庭出身の青年が「いいなあ」とつぶやくシーンなどもある。一方で、『さびしんぼう』や『寅47』（寅次郎の妹さくら夫婦、甥満男の一家）では典型的な核家族の一家団欒が描かれる（『さびしんぼう』には祖母がいるが、にぎやかな夕食としては描かれていない）。

食生活に関しては、他に、「コロッケには醤油をかけるかソースをかけるか」を恋人同士議論したり（『世界中』）、松茸を高級食材とみなしてけんかをしたり（『寅30』）、一攫千金を夢見たり（『SG』）、また「焼きそばパン」などという、主食であるパンの中に焼きそばが挟まっている食べ物を食べ盛り的高校生が好んで食べる（『世界中』）という項目も日本文化を反映する背景知識とみな

される。

レジャーや趣味に関して、『ダンス』で作品の主題にもなっている、「社交ダンスなんて日本人にはあわない」などという発言、『SG』における「ジャズなんておじさんの聞くもの」など、日本人の趣向を如実に表現していると思われる。また、パチンコに対して、ギャンブルの一つというよりは、大事なダンススクールの教師の送別会に行きそびれて何となくパチンコ屋で時間をつぶしたり（『ダンス』）、正月早々むしゃくしゃした気分を晴らそうと「パチンコでもしてくる！」と家をとび出したり（『寅47』）というように、単なる気晴らし、暇つぶしとして日常生活に入り込んでいるという位置づけであることなども、注目すべき背景知識の一つといえる。

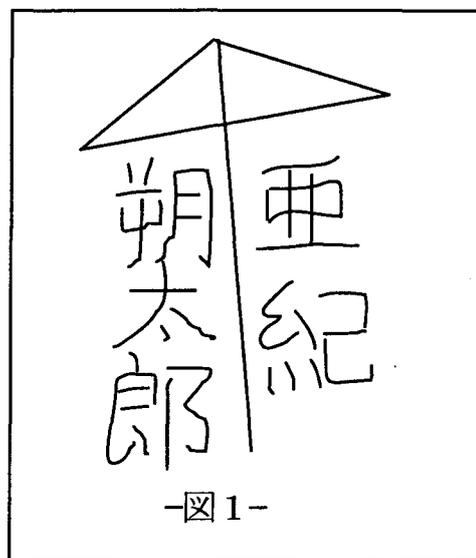
そのほか、仏教徒である寺の息子でもクリスマスプレゼントを意中の女性に渡そうとする場面から、日本人の日常的レベルにおける宗教観や、クリスマスなどが単なる楽しみの行事として社会に受け入れられている有様をうかがい知ることができる。また、「菜穂」という名前の説明で「ナツパの菜にイナホの穂です」という言い方（『寅47』）は中国や韓国など、漢字を用いる日本以外の国々でも同じようなことがあるのか、といった比較をすることで日本の独自性や、象徴的な文化的背景を指摘することもできるだろう。

3.3.3. 「恋愛・結婚」について

この種のテーマは、授業で使用したほとんどの作品に何らかの形で関わりを持つことであり、日本文化の中での恋愛観・結婚観というものを様々な形で表現している項目が多数ある。

日本文化に独特のものとして「見合い」がある⁷⁾。『おもひで』の中では、「あなたお見合い断ったでしょう。27歳にもなってあんないいお話もうないわよ。」というせりふがある。27歳の女性はお見合いをしてでも結婚をさせたいとする親の気持ちが描かれている。『寅47』では、隣の印刷工場の社長が「満男君、俺に任せてくれ。絶対にいい嫁さん世話するから。」と知人の息子の見合いを世話しようとする。『寅30』では、マドンナの家庭でのお見合いを断られたことが話題となる。これらの描写には、日本社会における「お見合い」の位置づけが明示されている。

『おもひで』では、最終場面が、農家の嫁になることを真剣に考えることを彷彿させる描写で終わっている。これは、都会のOLという、ただ何となく選んだ仕事に対する倦怠と罪悪感の裏返しであるが、このような仕事のことと結婚を分割できない日本の女性の立場というものを描いている。



熟年夫婦の無感動と倦怠、また、それらに付随する悩みなどは、『ダンス』『寅47』などに描かれ、熟年夫婦の間での夫婦愛のあり方も様々な形で現れている。

青春期・幼年期の淡い男女間のつきあい方などは、『さびしんぼう』や『おもひで』で知ることができ、『SG』では、恋愛までいかない微妙な男女関係が描かれている。

また、相合い傘の落書き（『おもひで』、『世界中』（図1）などには、気づかれることの少ない背景文化が反映していると思われる⁸⁾。

3.3.4. 「日常生活に入り込む「年中行事」について

年中行事、特に正月の風俗などは、外国人留学生が興味を持つ代表的な文化項目であり、桑本・宮本（200）で報告した口頭発表でのテーマには好んで選ばれたものの一つである。たとえば、正月の風景が現れたものとして『寅30・34・47』があるが、これらの映画における正月の描写は、正月の風物を基本に忠実に再現したように描かれており、伝統的日本文化の紹介としても利用可能な部分であると思われる。結婚式や葬式（『寅30』

のものは略式)の場面も、典型的なものとして細部の描写も含めて捉えることができる。これらの描写は、本来的な日本文化の教授という意味合いから考えるならば、十分に意味のあるものとして機能すると考えられる。しかし、本論における趣旨からすれば、これらを背景知識として位置づけることに価値を見いだすものであり、日常生活の中に潜む年中行事の捉えられ方を見つけ出す必要がある。

3.2.節⑨に分類した項目、結婚式、葬式、七五三、秋祭り、正月(『さびしんぼう』の場合)などについては、登場人物の日常の合間に入り込む形で表現されており、これらの描写の観察や登場人物のせりふなどから、人々の日常の中でこれら諸行事がどのように捉えられているのかを知ることができる。そのようなせりふのいくつかを挙げておく。

- ・「まあ、田舎の祭りやけど、ゆっくり見物してってください。」『寅47』
- ・「どうだろう、そんなに幸薄い美人だったら、ちゃんと供養してやっちゃあ。」『寅30』
- ・「(こどもの歌う歌を聴きながら)文化の日だねえ。」『寅34』

4. まとめと今後の課題

以上述べてきたとおり、日本映画の中には様々な形で文化的項目が介在しており、それらが、登場人物の何気ない言動の中に、また、描かれる場面、物品の中に現れる。本論では、そのような項目を文化的背景知識と位置づけ、それらに関する分析・考察を行った。このような背景知識の考察は、日本語教育の目的に沿う形で「日本事情」の教授に関わるものとして効果的に機能しうると考えられる。つまり、このような文化的背景知識が、日本のごくありふれた日常の中でどのようにふるまい、捉えられるのかを知ることで、日本文化の具象的な項目の理解のみならず、それらが日本社会にどのように根付き、社会的風習や、日本人のものの考え方に影響を与えているのか、また、それらそのものへの理解につながっていくものと期待できる。

映像資料に関しては、熊谷(2003)、水原(1999)が述べているように、映画よりテレビドラマの方が日常生活の状態に近いという点では資

料としてはより優れていると考えられる。ただし、ラドック(2002)のような聴解練習を主眼にした演習でなければ⁹⁾、テレビドラマは長すぎるといふきらいがある¹⁰⁾。したがって1編が90~150分程度の映画作品が、長さの面からいえば適当であったといえる。

背景知識の教授ということをさらに追究するならば、バラエティーやスポーツ中継などの即興性、独自性の強く表れるテレビ番組の使用が検討されてもいいと思う。このような映像使用によって、さらに違った形で日本文化が浮き彫りにされる余地が十分にある。コマーシャルやニュース報道を使用して、メディア・リテラシー(菅谷2000)の立場から日本文化を考察するという可能性もある¹¹⁾。これらに関しては、本学における日本事情の映像使用に関しての将来的な課題としておく。

本論執筆にあたり、佐藤直人氏、佐藤雅彦氏には貴重な助言をいただくとともに多大なる協力をいただいた。ここに感謝申し上げます。

注

- 1) 本学では1993年度より日本人学生の履修も可能にした(宮本1995)。また、宮本(1995)で、その経緯と「日本事情」の位置付けについても詳述している。
- 2) 実際に使用したビデオ作品(連続ドラマ『お見合い結婚』)の中で、第1話だけで「お返し、呉服店、ラーメン屋、正座、パチンコ、割り箸、畳、こたつ、障子、のれん、日本人のイタリアブランド好き、高級レストランでデート」などの日本特有の文化項目を確認している(ラドック2002:215)。
- 3) 映画とテレビドラマを比較すると、映画の方がせりふが短くなる傾向が強い(水原1999:29f.)。これは、映像の効果に頼る向きが強いせいだと考えられる(熊谷2003:7)。
- 4) 鑑賞に使用した映画の選定基準、コンセプトなどについては桑本・宮本(forthcoming)を参照のこと。
- 5) 映画は入手可能な限りDVDソフトを用い、その他の場合は通常のビデオテープを用いた。
- 6) 授業の本質的な実践は桑本・宮本(forthcoming)で報告している。授業の展開

は、一つの作品を2度の授業で鑑賞し、それに続く授業で全体を振り返り、担当教員によってコメントを加えたり、特に取り挙げたい部分を再生しつつ受講学生に問いかけるなどの活動を行った。

- 7) 韓国には似た風習があるとのことだが、日常的な場面での現れ方も含めて日本独自のものと考えていいと思う。
- 8) 授業で確認した限り、日本独自のサインらしい。
- 9) ラドック (2002) は、『お見合い結婚』という連続ドラマを使用している。
- 10) 通常は、毎週1時間全10~12回で完結するものが多く、断片的に使用するにも、ストーリーの展開を把握させるにもかなりの無理がある。
- 11) メディア・リテラシーの日本語教育への導入については門倉 (2002) を参照。

使用映画資料

- 『男はつらいよ・花も嵐も寅次郎 (第30作)』山田洋次監督, 1982年, 松竹 (106分)
- 『男はつらいよ・寅次郎真実一路 (第34作)』山田洋次監督, 1984年, 松竹 (105分)
- 『男はつらいよ・拝啓車寅次郎様 (第47作)』山田洋次監督, 1994年, 松竹 (101分)
- 『おもひでぽろぽろ』高畑勲監督, 1991年, スタジオジブリ (アニメーション作品) (119分)
- 『さびしんぼう』大林宣彦監督, 1985年, 東宝 (110分)
- 『Shall we ダンス?』周防正行監督, 1996年, 大映・日本テレビ放送網 (136分)
- 『SWING GIRLS』矢口史靖監督, 2004年, 東宝 (105分)
- 『世界の中心で、愛をさけぶ』行定勲監督, 2004年, 東宝・TBS (138分)
- 『釣りバカ日誌3』栗山富夫監督, 1990年, 松竹 (96分)
- 『釣りバカ日誌9』栗山富夫監督, 1997年, 松竹 (115分)

参考文献

- 門倉正美 (2002) 「テレビの力を日本語クラスで考えるーメディア・リテラシーと日本語教育」水谷修・李徳奉編『総合的日本語教育を求めて』国書刊行会, 494-508
- 熊谷智子 (2003) 「シナリオのある会話ードラマの日本語の特徴ー」『日本語学』第22巻第2号, 6-14
- 桑本裕二・宮本律子 (2005) 「双方向型異文化理解の試みとしての「日本事情」」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第27号, 87-95.
- 桑本裕二・宮本律子 (forthcoming) 「日本映画から考察する日本文化ー秋田大学における「日本事情」の実践からー」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第28号
- 菅谷明子 (2000) 『メディア・リテラシー』岩波新書
- 土井真美 (1997) 「映像素材の教材としての利用の可能性ー話しことば教育のための学習項目抽出ー」『日本語学』第16巻第9号, 42-50
- 水谷修 (1990) 「日本事情とは何か」『言語』第19巻第10号, 22-27.
- 水原明人 (1999) 「作る談話・脚本制作の現場」『日本語学』第18巻第11号, 28-39
- 宮本律子 (1995) 「「日本事情」をどう教えるかー秋田大学における実践報告 (1)ー」『秋田大学教育学部教育工学研究報告』第17号, 1-11.
- 宮本律子・村上東・日高水穂・中村裕・本間恵美子・小林綏枝 (1998) 「「日本事情」をどう教えるか 秋田大学における実践報告 (2)ーリレー式による日本事情講義の試みー」『秋田大学総合基礎教育研究紀要』第5集, 73-86.
- 宮本律子・松岡洋子 (1999) 「「日本事情」のオリエンテーション教育としての意義ー複数の授業形態の実践を通じてー」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第21号, 63-71.
- ラドック, カレン (2002) 「聴解指導・文化学習のためのドラマ使用」『ヨーロッパ日本語教育』no. 7, 213-220.